＜対談＞歴史のイエスをどう捉えるか

――現代の視点から――

笠原芳光・橋本滋男

イエスはキリストか

橋本　先生の新著『イエス　逆説の生涯』を拝見しまして、イエスはキリストではない、自らそういう自覚もなかったということですが、これは今日の聖書学の領域では常識になっていますね。

笠原　そのことと、今のキリスト教とのたいへんな違いはどうなっているのですか。イエスはキリストではないというのが聖書学者の常識になっていると言うなら、キリスト教を変えないといけない。最近、教会ではどんな話をしているのですか。

橋本　そこではイエスの宗教性、イエスの存在の宗教性を抜かすわけにはいかないでしょうね。イエス自身は、ブルトマンも言うように、一ユダヤ教徒であった。しかしどういうレベルであれ、キリストとかメシアということの受け取り方が根底にないとキリスト教自体が持たない。

笠原　持たなくてもいいでしょう。

橋本　今までのキリスト教の三位一体論とかが問題となるでしょう。

笠原　そういう教義は信じませんね。

橋本　信じないけれど、それはタテマエとしての機能もあります。100パーセントそれが崩れたら大変でしょうね。私自身は、イエスが伝えようとしたことを彼自身が本当に正確に把握し得ていたか。今のキリスト教の中ではイエスが把握したこと、認識したことは揺るがせないけれど、イエス自身の時代的な制約もありまして、十分には理解できていなかったのではないかと思う。

笠原　イエス自身がですか。

笠原芳光氏

橋本　福音書やパウロを読みまして、パウロには女性に対して差別的なところがありますね。我々はパウロが悪いと言いますね。福音書の中でも、おかしなところがあったりしますね。民族に対する偏見とか。

笠原　当時としてはね。

橋本　それはマタイが悪いとか、ルカが悪いとしてイエスを擁護する。だけどひょっとしたら、イエスもまだそのへんでは不十分であったのではないか、と思われますが、いかがでしょうか。

笠原　イエスも時代の人ですから完全でないところがあった。

橋本　そのへんの指摘をすべきでしょう。イエスが本当に指し示したものは何か、それが難しい。

笠原　難しいけれど、それはやらないといけない。

橋本　たとえばイエスが中核的な弟子たちを12人置きますね。あの中に女性がひとりもいません。十字架の時には女性がいたはずなのに、弟子たちの中核に女性を採用することがなかった。いろんな事情があったのかもしれません。女性に対して仕事をさせないという彼の考え方があったのではないかなとなると、イエスの思想に限界があったのかもしれない。

笠原　それは当時としては、ある意味では当然でしょう。イエスが12人の弟子を集めたというのは聖書学の定説ですか。

橋本　それは大丈夫だと思います。

笠原　僕は不定型だと思います。ある日は11人、ある日は10人、ある日は12人と。

橋本　12人の役割、全体の中での機能については変化があったでしょうけれど、12人のグループが形成されたことは確かだと思います。そのグループはその後、すぐ潰れてしまいますね、教会の中で。ユダが自殺した後、続かなかったことから考えると、初期教会の段階になってから12人のグル

ープを編成させたものではなかろうと思います。

橋本滋男氏

笠原　僕は聖書学者じゃないですけれど、イエスが弟子を集めたことは事実でしょう。弟子といっても、上下関係ではないですからね。同志というかな。イエスの考えでは、ヨハネ教団を飛び出してから、ああいう教団ね、修行とか禁欲とか、ヨハネもそれほど定型的ではなかったと思うけれど、そうではないもっと自由な集団を作ろうとしてやったのではないか。佐藤研さんも12人と言うのだけれど、そうかな。当時、12部族というのもあるけれども、12というのは実数ではない。イエスの思想はすべて教義的ではなく、組織主義的ではない。だから不定型という説です。

橋本　イエスの思想の中で、イスラエルの回復を目指すものがあったとすれば、12人は意味があるだろうと思います。イエスはあまり外国人のことを考えていませんものね。

笠原　その話は後でしましょう。

イエスの限界か

橋本　イエス自身の根源、真理についての把握の仕方、滝沢克己の言葉で言えば「インマヌエル」というものの把握の仕方が本当に正しかったか、十分であったか。伝える時に、うまく伝わらない部分が発生することを彼はあまり計算に入れていなかったのではないか。譬え話などでも、意味がわからなくなっているものがあります。借金の私文書偽造をしても友人関係を守れというルカ16章のところなど。

笠原　あれは、宗教は善悪の範囲を超えている、ニーチェの語を借りれば「善悪の彼岸」という考えでしょう。それよりも人間関係が大事だという大変危険な、そしてすばらしい思想です、親鸞の「善人なをもて往生をとぐ。

いはんや悪人をや」と同じ思想です。

橋本　ところがね、ルカ16章を見ますと、当時の人々が、ルカやその直前の人々が、それを理解できずに、いろんな解釈を付け加えていく伝承の経緯がある。そんなふうなところでイエスは誤解されたりしていて、誤解される多少の責任は彼自身にもあるだろうと思います。

笠原　僕は『イエス　逆説の生涯』というイエス伝を書いたけれど、今までのイエス伝は神学か聖書学なんですよ。小説の形の文学もありますが。神学はキリスト教の教義に基づいて形成されたものですから、その線でイエスをキリストとして、神の子として、終末論などもくっつけてやっている。それは極めて非歴史的なもの、主観的なものです。その主観が教会という組織で固められているからドグマになっているわけです。かつての多くのイエス伝は神学の立場から書かれている。1世紀前から客観的な歴史学としての聖書学が発達して、歴史の問題として聖書を批判的に読むようになった。それによって最近は聖書学的に書かれたイエス伝やイエス論が出てくる。荒井献さんなどはその最たるものです。ところが、聖書学という歴史学によるイエスの問題は、客観的なイエスを描くのが主であって、イエスが我々にとってどう考えられるか、主観的な、実存的な、主体的なイエスの把握はあまりないのではないか。今までは、この二つ、主観主義と客観主義に分裂している。その他に文学として扱っているイエス論があるけれども、それはまた別の意味での主観です。文学としてすぐれているのは、たとえば太宰治の『駈込み訴へ』です。しかし、それだけではイエスは把握できないのではないかというのがこんどの本の基本になっています。

思想史という方法

笠原　それで僕が考えたのは、思想史という方法です。歴史というのは客観主義で言うような、一つの分野の問題だけではなく、実際にはもっといろんな問題が重なりあって存在している。横断的、重層的に考えられなければ一人の人物も理解できない。歴史上の優れた人物を書く場合にも、その当時の社会情勢とか、さまざまなものとの関連があるわけです。そういうものを交えて把握しなければならないのじゃないですか。聖書をテキストというけれども、コンテ

キストというものがある。「文脈」という単純な訳ではなく、コンテキストとはもっと重なり合っているものだと思う。

橋本　環境とか、状況とかいうことですね。

笠原　コンテキストとして聖書を把握する必要があるのではないですか。たとえば聖書学の中でも、戦後、編集史的研究が出てきた。福音書の記者は編集者であって、マルコはこういう考え、マタイはこういう考えだという。マタイ福音書とマルコ福音書はかなり違う。マタイは弟子を尊重している。ところがマルコは弟子を批判している。そこから、その向こうにあるイエスを推測する。マタイ福音書だけの研究ではない。マルコだけの研究ではない。マタイとマルコ、ルカ、ヨハネ、さらにトマスなどを交えて理解しないといけない。それでも足らんのではないか。それ以前、それ以後のさまざまな思想、現代に至る膨大な歴史の思想の網の中でイエスを考えたらどうかというのが僕の考えです。思想史的に考える。

それは例えば、教会で説教をする。その時に聖書に基づいて話をするだけでは人心にアピールしないので、文学の話をしたり、芸術の話をしたり、社会情勢の話をしたりする。それを例話としてやる。それは福音書のテキストを中心にして、補助的に文学や社会問題を用いたりしているに過ぎないのではないか。それらをもっと同等に扱ったらどうか。吉本隆明がこういうことを言っています。『重層的な非決定へ』という埴谷雄高との論争のなかで、マルクスの『資本論』と黒柳徹子の『窓際のトットちゃん』を同等の水準として同じ文体と言語で論じないといけない。どこかに重心を置くことを否定して、層ごとにおなじ重量で非決定に対応することだと言っています。埴谷さんは古い社会主義が残っているタイプなので、それで吉本隆明が『アンアン』という雑誌に頼まれて、コムデギャルソンの服を着て写真をとったのはけしからん。タイの青年が見たらどんなに怒るだろうと言った。それに対して何を言うか。今や『アンアン』という雑誌は昔、労働者と言われた人たちも喜んで読んでいる。タイの青年だって関心があるに違いない。そういう問題で言うならば、今は問題を一つのものを中心にしたり、上位のものとして解釈するのではなく、いろいろな思想が層を成しているという構造主義的な考え方です。ミシェル・フーコーも言っていますが、層を成しているところを、一つのところに決定しな

いで判断する。マルクスの『資本論』と『窓際のトットちゃん』をどっちが優れているかではなく、それぞれのものとして把握して、そこから真理を導き出すべきだと言っている。

それを援用すれば、福音書をテキストにするだけでなく、あらゆる問題をコンテキストとしてイエスを考えたらどうか。イエスだけでなく、ニーチェを考える時も、隣のおばさんを考える時もできる読み方です。テキストをコンテキストとして、単なる文脈ではなく重層的、横断的な意味で考えることによって、イエスを理解するべきでしょう。これが思想史としての方法論です。

橋本　ただ我々としましてはね、そうなってきた時に、イエスをいろいろ見ていく場合の資料にこだわるわけです。資料のないところに歴史学の立場からは勝手に発言してはいけない。考古学などで土器が出てきますね。物証が出てきて、壊れていてかけらになっていて石膏でつないでいく時に、足りない分がありますね。把手がもげていたとして、それが大きな形なのか小さな形なのか、自分の好きなように把手を復元してはいけないんですよね。

笠原　いわゆる客観的な歴史の場合はそうですよ。しかし史実をもとにして判断し、想像することはできます。

橋本　他のものを比較しながらある程度の根拠を持って判断できればいいが、ない場合には想像や好みに基づいて安易な断定をやってはいけない。イエスについて判断する時も資料に縛られる。それ以上やることに対する躊躇が強いですね。

笠原　それは聖書学者だからでしょう？

橋本　もう一つは、心理学的な読み込みをしてはいけないというためらいがあるわけです。

笠原　それが大分変わってきたんですよ。

橋本　その場合の根拠についてどこまで言えるか。推測を重ねることにならないかということが引っかかってくる。

笠原　それじゃ、物証だけが重要で、人間はそれについてどう感じるかという問題がない。そこが思想史と違う。

橋本　思想史に踏み込めば、多様な類似現象から推測をしていくことはできるでしょうけれど、同時にそうではないかもしれないということもあるでしょう。

笠原　危険はある。それによってまたすばらしいことがわかってくる。そこが面白いわけです。

編集史について

橋本　編集史に戻っていきますと、マルコ福音書に対しては、編集史方法がうまく適応しえないところがありますね。マタイやルカはマルコ福音書と比較してどこを変更したか、加工したところについてなぜそうしたか。そういうことを積み重ねて一貫して著者の思想を復元できますが、マルコの場合、直接比較するものがないわけです。編集史方法はマルコに対して適応しにくい。そこで用語、文体、思想など、マルコ福音書そのものの中だけでの一貫性を求めることになります。そういう点でマルコ福音書を高く評価するとか、そのまますんなり受け取る傾向がありますね。100年前、ウィリアム・ヴレーデが『メシアの秘密』という書でマルコ自身に一つの偏向があり、彼の独自な神学の立場からイエスを書いていることを指摘した。マルコが必ずしもそのまま資料として正しいわけではないと。あのへんの方法論的な抑制を我々、思い出していかないといけないのではないか。マルコ福音書はイエスが受難する視点で描いている。

笠原　マルコだって主観的に書いている。

橋本　マルコにおいてイエスは自分は死ぬ覚悟だと3回言って、3回とも弟子がわからないままついていくというところ自体、すでに歴史性が疑われるし、十字架もどれくらい歴史的に正確に描いているか。紀元30年くらいの過越しの日に殺されたことは歴史的に確実でしょうが、その描写から裁判や処刑の最後のところまでについてはかなりフィクションを感じます。先生が重点を置いておられる百卒長（百人隊長）の叫びも。

笠原　百卒長の「まことにこの人は神の子であった」という発言は史実ではないでしょうが、イエスの逆説性をよく言いあらわしていると解することはできます。付け加えたいのは、思想史の方法に関連して、カール・バルトが、私はこの人の考えに反対ですけれどね、面白いことを言っている。どこで言っているか文献的に覚えていないのですが、「聖書の最良の注解書は日々

の新聞である」。今、私が言ったことと関係があるんじゃないですか。

橋本　そこのところだけでバルトの真意を読めば、そうかもしれません。

笠原　ただバルトは聖書を上位に置いて、新聞紙を下位に置いているから、私はそれは間違いだと思う。産経新聞とマルコ福音書を同列に置いて考えないといけないとカール・バルトに言いたい。そうするとどうなるか。その時に初めて新しい意味でイエスがわかる。バルトは聖書解釈も説教もきわめて主観的でしょう。あれは聖書学から言うと目茶苦茶です。バルトくらい無茶苦茶に読み込んでいる人はいない。同志社は幸いにしてそれほどバルトに汚染されていないけれど、近年は新しい思想も生んでいない。かつては自由主義神学や新神学が特色であったが、その批判的継承や再評価はなされていない。

そこで、イエスが生まれてから後の問題に行きませんか。

橋本　その前に、やはり方法論に関係してくるんですが、編集史とのつながりで言いますと、マルコ福音書に依存するという傾向は危険ではないかなと。というのは、最初の福音書ということもありますが、福音書という文学ジャンルを作った貢献は認めますが、彼におきましても、公生涯以前の、発展途上のイエスは全く無視される。先生の言葉で言えば「発心」のところがないわけです。すでに救い主になり、未完成のところは出ていない。その点ですでにマルコにはイエスに対する信仰的な偏見がありますね。彼にとってはイエスのそういう未完成の段階は必要なかった。そのあたりを批判しながら我々がどこまで復元できるか。

イエスの生涯

笠原　マルコがなぜ公生涯にこだわって、「私生涯」という言葉は好きじゃないけれど、私生涯を無視したか。マルコはイエスに出会ったかどうかはわからない。出会っていないとしても彼がそれ以前のことを知らないだけでなく、問題にしていない。

橋本　知っていても必要ないということでしょうね。

笠原　どこの生まれであるから偉いとか、駄目とか、誰それの子だからよいとか、つまらんとかでなくて、イエスが人々の前に現れて言った言葉、

思想がすばらしいということです。現在的なんです。実存的な発想です。主体的な把握であって、客観的な歴史性にこだわっていない。そういうことじゃないですか。

橋本　イエスがヨハネのところに出かける話は載っていますが、マルコにはそれ以前の少年時代の生育、家庭環境に関心を持たなかったということがありますね。

笠原　当時、イエスに出会った人は数多くいたでしょう。だけどナザレの村では違う。ナザレの村の人はイエスが小便小僧だった時から知っている。だから奇跡も起こらなかったと、福音書にある。つまりナザレの人々は子ども時代のイエスを知っているが、そうでない人々は知らないから、すばらしい人が来たと思った。ついて行きたいという気持ちになった。そういうところにマルコは立っていたんじゃないか。ところがマタイやルカになってしばらく時代がたつと、あんなすばらしい人はふつうでない生まれかたをしたに違いないと言うようになる。

橋本　旧約聖書の実現であったとか。

笠原　例えば突然、芥川賞をもらって作家になった。今まで無名だった人が。それならあの人はどんなすばらしい人だったのかとなってくる。同志社大学を中退したとか。同志社幼稚園に行っていたとか。そういうことに及んで伝記が作られるわけです。

橋本　その時に、マルコはイエスのすばらしさに触れ得たから、イエスを描くのはいいんですけれども、それはすでにイエスを高めていますね。自分もまた不完全なものであるが、イエスのようになれるということではなく、イエスの不完全さを捨て去って、完全者としてできあがった人として描くという。そういうところがある。

笠原　イエスにも欠点があるのだから、そういうものを書いてくれたらいいんだけれど、そういうのは残っていない。そういう意味では確かにそうですね。偉人伝、すばしらいところだけ書く。こんなすばらしい偉人は子どもの時から偉かったと。ルカはそういうふうに書いている。

橋本　そういう面と同時に、イエスの未完成なところを書いている点とし

ては、洗礼者ヨハネの活動を見て、教えを乞う、弟子入りをする。あれは初期の教会員にとって始末に困った部分でしょうね。ヨハネ福音書ではその話は全然書かない。

笠原　イチジクの木に実がなっていないのを呪って枯れたという話が出てくるでしょう。あれなんか腹立ち紛れです。ああいうのは逆に実際にあったのではないか。何も聖なる姿ではない。そういうことがチラッと出てくるんですよ。

橋本　その点では、福音書は面白い。

笠原　いろいろ穴があるんです。ところでイエスが紀元前4年、それ以前にナザレで生まれたのは定説でしょう？

橋本　ベツレヘムではないですね。

笠原　母親がマリアで父親がヨセフというのも定説と言っていいんじゃないですか。

橋本　定説と言えるかどうか、そこまで判断する根拠が。

笠原　否定することもできないけれども。

橋本　そういう家族の中で生まれたと。

笠原　ヨセフは木工職人だった。マリアは普通のおばさんだった。木工職人は最下層ではなく中流階級だった。

橋本　それについてはね、あの時代の社会情勢と関係がありますが、農民でない、土地を持っていないということは流れ者的な面がある。貧しい階層ではなかったかという説もありますね。

笠原　説もある。職人は中流階級という説もある。

橋本　ペトロとかガリラヤにいるのは網元です。金持ちだった。雇い人とか船を持っている。

笠原　プロレタリアではない。

橋本　イエス自身については必ずしも貧しかったか豊かだったか決め手がない。

笠原　ヨセフが早く死んだのは推測されていますが、それはイエスの少年時代か青年前期か。ヨセフから大工の仕事を教わったのは事実でしょう。

橋本　彼は長男として生まれましたから、父親が亡くなれば一家の中心と

して働かざるを得ないでしょうね。

笠原　イエスは長男ですね。弟と妹がいた。弟のヤコブはイエスと違って組織志向です。兄の死後、他の弟子と一緒になって教団を作って喜んでいる。宗教的には、まったくイエスのようではなかった。

橋本　彼がね、エルサレム教会の中心になるんですよね。ペトロは追い出されて外に行ってしまう。イエスが生きている時にイエスの教えに直接触れることもなくて、イエスの死後にヤコブがエルサレム教会の指導者になっていく仕組みは問題を含んでいますね。初期の教会は血縁関係を重視する。イエスの考え方と全然違う。イエスは「私の兄弟とは誰か、母とは誰か」と血縁を切る。エルサレム教会では血縁を尊重するという体質を残したということで、反面教師的な役割をヤコブは残しましたね。

笠原　それでね、イエスの父親ヨセフに関して、ヨセフが早く死んだことが、後にイエスが神を「父」と呼んだ、「アバ」と呼んだ。父上様ではなく、「親父」「おとっつぁん」と呼んだ。父に対する思慕を表していると私は考えたんですよ。こんどの本にそう書いた。これは私のまったくの独創ではない。ヒントはあるんです。それは同志社大学の神学部教授であられた富森京次先生が昭和9年に出された『イエスの私生涯』という本にあるんです。今はほとんど読まれていないと思うんですが、面白いと思ったのは、「公生涯の言行に見出されるイエスの宗教の一つの獨異性が、神を父と觀る所にあるとするならば、イエスが夙く父ヨセフを喪つて、一家の長として多くの弟妹を見て來た私生涯に、多くの史實を見出すことが出來るのである」。これは誰かの引用ではないんですね。あるいは「イエスの人生苦の體驗は、夙に父を失つたといふこの事に始つて居る。然し乍らイエスの宗教的體驗は、またこゝに深められて行つた譯であつた。神を天父と仰ぎ、人類を同胞と見たイエスの宗教は、會堂の教に俟つ所あつた事はいふまでもないが、然しまた逝きし慈父ヨセフに對する追慕の情や、父に代りて多くの弟妹を勞つてゆく家兄としての體驗の賜物といはなくてはなるまい」。ここにヒントを得て、私はイエスが神を父と呼んだ、未だにキリスト教ですら「父なる神様」と言っているけれども、そういうのではなく、イエスは神をパーソナルに、

ヒューマンに、親父、おとっつぁんと言ったのではないか。

橋本　それは卓見ですよ。これを発掘なさったところに、同志社の絆の強さを感じます。

笠原　佐藤研さんもそれは面白い、賛成だと言っていました。もとは富森先生です。ただし富森先生は、はっきり書いていない。僕がはっきり書いたのです。

橋本　ただね、福音書の中で書いた人たちのバイアスがかかっているけれど、父という言葉に対して「私の父」「あなたの父」とかいうことがありますが、イエスが自分を含めて弟子たちに「私たちの父」と神を言っているところがないんです。そのへんがキリスト教のバイアスなのかなと思いますけれども。しかしイエス自身、「私が他の人と違う特別の意味で神の子である」と言っているところもない。「私だけが特別に神の子である」とも言っていない。「主の祈り」の中でも、「私たちの父よ」と言っていて、これはジーザスセミナーの『五つの福音書』で黒になるか赤になるかの判定は別にしても、仲間の弟子たちが「私たちの父」と神のことを呼ぶことは彼は認めていたでしょうね。イエスが弟子たちも含めて「私たちの父」ということは言っていない。気になるところですね。

笠原　イエスの神観というのがあるとすれば、それまでのユダヤ教のヤハウェ神に対する考えや後のキリスト教神学の神観とはかなり違うのではないか。イエス以後のキリスト教の神とは何か。イエスはまことの神にして、まことの人とか、三位一体とか。それ以前のユダヤ教でも絶対者なる神とか創造の神、愛の神、怒りの神とか言っているが、イエスはそういうことを言っていない。神をアバ（おやじ）と呼んだのはヨセフに対する思慕から出たファーザーコンプレックスの表現でしょう。神をパーソナルに、ヒューマンにとらえる。これは神の人間化ですよ。カール・バルトも「神の人間性」という論文を晩年に書いた。初期の『ローマ書講解』とはだいぶ違う。バルトのような人ですらだんだん変わってきている。

イエスの家族関係

橋本　もう一つ、母親マリアとのこと。それと関連して、生活苦がイエス

の思想形成の上であった。彼は30何歳までずっと独身でしょう？

笠原　その独身者性がすばらしい。

橋本　当時、結婚年齢は今より若い。平均年齢が短いこともありますが、30何歳まで独身というのは変な人ですよ。

笠原　しかし女性関係は自由であったと思う。それでなかったら遊女に親切にしなかったでしょう。イエスは女性を弟子にしなかったと言われるけれど、弟子は不定型ですから、外には女性が一杯いたでしょう。今で言えばフェミニストですよ。かなり女性との交流があった。

橋本　交流は具体的なことはわかりませんけれど。ヨハネ福音書８章に出てきますね。

笠原　ヨハネ福音書の中では特異なところです。ヨハネの流れではない別の伝承でしょう。

橋本　伝承史的にはルカに近い。逆に「汝らのうちまず罪なき者が石を投げろ」と言われて、すごすごと帰った人たちも偉いと思います。今なら自分の正しさを証明するためにも石を投げますよ。イエスも投げなかったけれども、回りの人たちも。

笠原　あの章は面白いですね。女には親切であった。しかし母親にはちょっと不和というと言い過ぎかもしれないが、親しくなかった。

橋本　そういう点で思い浮かべることは、例外的ですが、外国人であるにもかかわらず、娘が病気だと言うと、その時は治してやる。弟子の母親が出てきて息子の面倒をみてくれと言うと、厳しいことを言いますね。マタイの方ですが。

笠原　マルコにもあるでしょう。ルカにもあるんです。マルコ３章の方はイエスが話をしている時に母親がやってきて、「わが母とは誰ぞや。ここにおる者が母親だ、兄弟だ」と民衆を指して言った。マタイの方は弟子の方を指して言っている。編集史的に面白い。マルコの方が近いと思います、実際にあったとすれば。ということは、母親に対してそんなに愛着を感じていなかったのではないか。もう一か所、ルカ11章にあるんです。「あなたが吸った乳房はなんと恵まれているでしょう」と言われて、「いや恵まれてい

るのは、神の言を聞いて、守る人だ」と言ったとか。

大体、息子にとっては母親は最初の異性です。父親は煙たい。イエスはそれが逆なんだな。ふつうの男性は、例えば鶴見俊輔氏にはマザーコンプレックスがある。あの人に「死んだら、どうするんですか」と聞くと、「聖書を読んでください」「どこを読むんですか」「コリント前書13章です」。パウロが愛という言葉を追っかけ廻しているところです。なんで変なところを読むのかと思ったら、しばらくしてハタとわかった。お母さんの名前は愛子ですから。鶴見祐輔夫人ですよ。後藤新平の娘です。鶴見さんと対談した時に聞いたら「そうかもしれません」と。ボードレールも数多の女性とかかわったけれど、最後は母親に抱かれて死ぬんですよ。イエスの場合はファーザーコンプレックスです。

橋本　イエスの神観の根底に、肉親への思いがこもっているというのは面白いと思いますね。

笠原　こんどの本に「発心」ということをなぜ書いたのか。イエスがキリストであり、神の子であるならば始めから発心しているわけです。途中で発心するような俗人ではない。

橋本　福音書記者の立場からすると、そう書くことができない。

笠原　人間として考えたら、イエスは父親を失ったことに対するショックが大きい。仏陀は生まれた時に母親はすぐに死んだ。鎌倉時代の法然、親鸞、道元、一遍も。日蓮だけが違う。同時代の妙恵も。彼等は父または母、または両方を失っている。その後に宗教者になっていく。そのことから思うと、イエスの発心の一つの原因は、父を失ったことにあるのではないか。そしてヨハネ教団に入った。ちょっと飛躍ですか。

橋本　可能性はあるでしょうけれども、断定しにくいところがありますね。というのは、洗礼者ヨハネとイエスはあまり年齢的に違わない。父親イメージを求めてというのは難しい。

笠原　父親イメージとは言っていない。父親の死によって挫折したので宗教心を起こして、見渡したところ、大教派のパリサイやサドカイではない真面目な厳しいところに青年は憧れますよ。異端的なヨハネ教団に入った。

ヨハネを尊敬していたと思います。だが入ってみてわかった。禁欲主義、修行主義でしょう。それにヨハネはヘロデに殺された。それで長くいなかった。第二の離脱をしたというのが私の説です。

橋本　それはいいと思いますね。ヨハネから受け継いだのは終末論でしょうね。

笠原　イエスは積極的な終末論は持っていない。

橋本　持ってないのか持っているのかわからないところが、イエスの思想にはあります。

笠原　終末的な思想はあったでしょうがね。

橋本　実存的な考え方はどうしても終末論的になる。しかし終末論でははかれないような気楽さみたいな、裁きの前に自分の行動を考えるのではない気楽さがいくつも出てきますからね。すでに救われている。終末論には前提に律法があって、律法に対する違反として裁きがあるという時間の流れがある。イエスにはそれが欠けているところがあるわけです。先きのことに対する配慮を放棄しています。悪い者にもよい者にも神は雨を降らせるというと、終末論は潰れてしまう。明日のことを思い煩うなというのも、終末を考えなくてもいい、裁きを考えなくてもいい。

笠原　明日は明日の風が吹く。ニヒリズムを反転さすアナキズム。私はイエスはアナキスト、つまり権力否定者だと思う。

橋本　ある意味でヨハネから受け継いだものとしては終末論的な考え方は一部あったと思う。しかしイエス自身は終末論では割り切れないところがある。

笠原　すくなくともキリスト教の終末論ではない。

橋本　『イエス・ルネッサンス』でボルクなど、終末論とは関係のないイエス像を出しています。ヨハネから受け継がなかったもので、禁欲主義を批判することがある。もう一つは洗礼という儀式は受け付けなかったというのがありますね。

洗礼について

笠原　それは大きい問題です。イエスは洗礼を受けたにもかかわらず、人に洗礼を授けていない。ということは、洗礼は意味がないと考えたのではないか。

橋本　グループに入るのに資格とか条件を無視する。洗礼の前提として悔い改めがありますが、イエスはそれさえも要求しなかったと思われます。

笠原　ヨハネは誰にでも洗礼を授けた。しかしイエスは洗礼も授けなくていいと思った。イエス集団には洗礼はなかった。昨日の友は今日の敵。今日の敵は明日の友というのがあるんですよ。誰が来てもいい。不定型です。その後、なぜキリスト教は、イエスが否定したと言っていい洗礼を、カトリックもオーソドックスもプロテスタントも、無教会主義は違うけれど、取り入れたのか。無教会主義だって内村鑑三は「どうしても先生の洗礼を受けたい」と言われて授けた。彼には授ける資格はないんですよ。ともかくなぜ洗礼が必要なのか。

橋本　それはね、多分、組織論とつながりますね。

笠原　入会儀式でしょう？

橋本　それがしっかりしてないと、自覚というか、立場ということが確立しない。

笠原　マルチン・ルターは困った時に、「私は洗礼を受けている」と指で机に書いたらしい。そういうことでしょう？

橋本　輪の中の内と外を区別する発想が組織論としては当然出てくる。

笠原　だから僕が言いたいのは、イエスは組織を作らなかった。

橋本　それは言えますね。

笠原　教義と儀礼と組織は宗教の3大要素だという意味のことをフランスの社会学者のデュルケムが言っているんです。そういうことから言うと、イエスはそのすべてを作らなかった。宗教心、宗教性が重要なんです。

橋本　ドグマが出てくるのは後の世代ですが、しかしドグマを生み出すようなものはイエスの中にすでにあります。これがなかったら思想活動は成り立たない。

笠原　ドクマではないでしょう。思想はあったけれどドクマではない。

橋本　それを論理化させる作業が後の世代には必然的に出てくると思います。

笠原　それが間違いです。

橋本　どうやって自分自身を納得させるか、人々に伝達するかで論理は当然必要になってくる。

笠原　そうですか。私は42年間、森集会という会員制でない、聖書を古典として読む集まりをやっていますけれど、多少始めの頃は今とは違うにしても、一貫してドグマを否定しています。

橋本　キリスト教のドクマは否定していますけれど、先生なりのドグマはあると思う。

笠原　それがドグマとどうして言える？

橋本　キリスト論をお持ちでしょう？

笠原　イエス論です。それはドグマですか。ドグマならざる思想ですよ。ドグマと思想は違うんですよ。イデオロギーと思想は違うんですよ。マルクス主義が誤ったのは思想をイデオロギーにしたからです。マルクスはマルクス主義ではないのです。

橋本　イエスは儀礼とか組織、制度は受け継がなかった。それを初期の教会がなぜ受け入れたかが問題です。

笠原　それは組織拡大が目的だからです。宗教に党派性はいらないのに、たいていの宗教教団は政党と同じ党派性がある。イエスはアナキストです。イエスは家を離脱し、ヨハネ教団を離脱し、自立した。最後に自分の集団からも離脱する。

橋本　それはね、そういうふうに読めるということであって、歴史的にそうであったかどうかは置いておきますけれど。福音書の文章を読む限り、彼の方から自発的に声をかけていますね。弟子たちの方から聞いて面白かったからついていこうかではなくて。

笠原　でも、それは組織化ではなく、思想の共鳴を求めたのですよ。

橋本　浜辺で網を繕っているところに声をかけたというのは理念的な場面設定であるかもしれません。イエスの言葉から遡って物語ができているから、歴史的に正しいかどうかは判断できない、という考え方ですが。

笠原　ガリラヤの漁師たちがイエスの弟子になったのは、自由な思想に共鳴したのでしょう。

橋本　弟子たちはイエスを理想化した。そういう形で彼の活動が広がっていく。

12人のグループ

笠原　12人の問題が出てくる。橋本先生としては12ですが。

橋本　全体をまとめる世話役みたいな形で、12人のグループがあって、イエス自身がイスラエルの旧約聖書で忘れ去られていたものを回復させるという意味で、それをめざしていったのではないか。12人というグループがあっても不当ではない。

笠原　12というのは定型としてではなく、象徴的な意味ではないですか。

橋本　あの中にユダがおりますね。

笠原　それが面白いね。

橋本　ユダがなぜイエスを裏切ったかというのは、悪魔が入ったとか、金に目が眩んだとか福音書に理由が書いてありますが、これはいわばイエスの失敗ですよ。一緒に飯を食いながら仲間を説得することかできなかった。裏切るということを見抜くこともできなかったのは、イエスの失敗ですよね。

笠原　最後には見抜いているみたいなことは言っていますけれどね。最後の晩餐の時に。

橋本　生まれなかった方がよかっただろうとか。

笠原　あれは言ってはいけない。言ったかもしれませんが。

橋本　そういう人間が12人の中にいるということは、イエスにとってイメージとしてマイナスでしょう。そういうことが書いてある。従って12人のグループが生前の時からあったんだと私は思いますけれどね。

笠原　12という言葉がユダヤではよく出てきます。それをイエスが踏襲したとは思えない。私はユダヤ教とイエスは非常に違うと思いますけれどね。

橋本　批判はしたけれど否定はしない。

笠原　律法についてはね。マタイ福音書は律法の成就とも言っていますね。

橋本　ブルトマンにしても最近の研究者にしても、イエスはユダヤ人であった、ユダヤ教の中にあった、それを踏まえた上で当時のユダヤ教を研究してみるという方向ですから、イエスがユダヤ教の中にいたということはいいんじゃないかと思います。

ユダヤ教に対して

笠原　ユダヤ教にもいろいろある。ユダヤ教の中にいるということは、ユダヤ教べったりではなくて批判も含めて。自立したイエスの不定型ということに関連して言えば、イエスはアナキストであるというのはルナンが言っているんですよ。ルナンの『イエス伝』は非常によい。ルナンは19世紀最高の文人なんです。20世紀はヴァレリーですが。実地調査もしている。現地まで行って。文学的だと見られているけれど、今の歴史研究にかなり近いところがある。その中でイエスはアナキストと書いている。

橋本　それはね、既存の秩序を壊すような結果であっても、そういう効果を彼は見ていたと思います。神殿で両替人とか犠牲の動物を売り買いしている人を追い出すところにも見られるでしょうね。しかし神殿で彼がそういう行動に出たのはとても計画的とは思えない。あんなことをやっても翌日には元通りに店を広げますからね。

笠原　津田穣訳のルナン『イエス伝』第7章に「實際、イエスを當時の煽動者やあらゆる世紀の煽動者たちと區別するもの、それは、イエスの完全な理想主義である。イエスは、ある意味で無政府論者である。彼は、この世の政治について何の觀念も持たないからである。この政治は、彼にとつて、ただもうそれだけで、誤謬に思はれるのである。彼は、政治については、漠然とした用語で、政治的觀念のまるでない民衆のやうな口振りで、語つてゐる。爲政者はみな、彼の目には、神の民の當然の敵に見える。彼は、警察との紛爭を、それを恥づべきものとは一向考へずに、弟子たちに豫告してゐる。しかし、權力者、富者に取つて代らうといふ試みは、決して彼には見られない」。かつてのソーシャリスト、ボルシェヴィキズムはブルジョワジーの権力を打倒してプロレタリアが権力を握ろうとする。レーニンがそうだった。それでのちに失敗した。ルナンは続いて言っています。

「彼は富者、權力者を亡ぼさうとする、が、これらに取つて代らうとはしないのである。彼は、弟子たちに、迫害、苦痛を豫言してゐる、が、武力的抵抗を考へたやうすは、唯の一度も見られない。人は苦惱と諦めとによ

つて力に滿ち、純い心によつて權力に打勝つといふのが、イエス固有の思想である」。ガンジーみたいですね。「イエスは、唯心論者でない、なぜなら彼にとつてすべては、觸れることのできる實現に到達するのであるから。むしろ彼は、完全な理想主義者である。なぜなら物質は彼にとつて觀念の符牒であるに過ぎず、現實は、目に見えぬものの生ける表現に過ぎないのであるから」。これがルナンの『イエス伝』のハイライトだと思う。

こういうことを言った人は日本では有島武郎です。これに近い。イエスを広い意味でのアナキストだと言っている。アナキストもいろいろあり、幸徳秋水もいるし、大杉栄もいる。石川三四郎のような、埴谷雄高のような、鶴見俊輔のようなアナキストもいる。イエスは啓蒙的なアナキストであったのではないかという気がします。

橋本　その当時、権力に逆らう運動をした人は多くいて、自ら根拠として「我はメシアなり」とやった人たちはイエスの他にも何人もいた。

笠原　一杯いた。おかしい人もいたでしょう。

橋本　テューダとかユダとかも出ていますね。

笠原　そういう人が「キリスト」にならずに、自分はキリストだと言わなかった人がキリストになったのが歴史のアイロニーです。

橋本　そういう点で、キリスト教を批判するというところが面白いところですね。

笠原　そうですよ。それをイエス・キリストと称しているのはおかしい。

橋本　かつて教会が栄えて神父さんがきれいな衣装を着る時に、それではだめだと教会を捨ててイエスに帰れという運動もありましたが、そういう意味とは違う意味でイエスに帰れと言っているわけですよね。

笠原　そうですね。もっと根本的な意味でね。イエスに帰れということは原始教団に帰ることではない。キリスト以前のイエスに帰る。バートン・マックの説は反対もあるらしいけれど、イエスは当時の人々にとっては自由な教師であった。しかしディオゲネスのような人ではないかというのは、ちょっと勇み足だけれど。

橋本　犬儒派のイエスですね。

笠原　自由な教師。初期のQ資料にはキリストというのは出てこないんです。

橋本　そうですね。

笠原　Q資料はマルコ福音書より初期でしょ。イエスは途中でキリストにされたんです。

橋本　それはなぜそうなったかということを考える必要があるでしょう。

笠原　絶対を求めるという人が多いからでしょう。

イエスの死を巡って

橋本　それはイエスの死のショックというものがどれほどのものであったかということと関係してきますね。Qには受難物語がない。イエスの死を通してイエスを見るのではなく、イエスの言葉だけで見ていく。ところがマルコはイエスの死を通してイエスを見る。

笠原　そこからキリストになった。Q資料ではキリストにならない。マルコ福音書よりQ資料のイエスが本当のイエスに近いでしょう。教団を一切作らない。教義も作らない。儀礼も行わない。しかし世の中には権力や絶対的なものを求める人が多いから。いわゆる救済はそういう考えのものが多い。そういう人にとってはキリスト教を信じたらいいんです。その人の信仰はそれでいい。私はそんなの信じられない。

橋本　それはそれで結構だと思いますよ。

セフォリスの町

橋本　イエスが伝道をやっていく。ナザレで生まれて育って、その中でセフォリスという町がどのような位置を持っていたかも問題でしょう。

笠原　セフォリスについても富森京次先生がさきの本に書いている。「わけてもナザレの里や、その西北一里餘の所にあるガリラヤの首都セフオリスの研究は大切である」。セフォリスについて詳しく書いてある。「斯く異邦人の多く住む町の中で、セフオリスが最も大いなる都であつた。セフオリスはナザレの西北數哩の所にあつて、徒歩僅に一時間餘の行程である」。京都の市中から山科の向こうくらい。「而かもセフオリスはガリラヤの首都であ

つた。紀元後三〇年頃新たなる都テベリウスがガリラヤ湖の西岸に建てらるゝに至るまで、セフオリスは實にガリラヤの國守ヘロデ・アンテパスの王宮の所在地であつた『やはらかき衣を着たる王の家の者』の居た所である」。ルカ7章25節に「しなやかな服を着た人と華やかな衣を着て贅沢な暮らしをする人なら宮殿にいる」とある。宮殿はここでしょうか。バシレイオスという言葉です。宮殿であって神殿ではない。神殿はエルサレム、宮殿はセフォリスにあった。ガリラヤ一の大都会でしょう。「そこにはナザレの里では目擊する事の出來ない複雜な世相が渦を卷いて居たであらう。『如何にせん、主人わが職を奪ふ。われ土掘るには力なく、物乞ふは恥かし。我なすべき事こそ知りたれ』とて、主人の負債者の負債を削減した『富める人の支配人』(ルカ一六の一一八)、または『神を畏れず、人を顧みぬ不義なる裁判人』(ルカ一八の一一八)といつたやうな輩は、草深いナザレの里では見出す事が出來なかつたであらう。そこにはギリシャの商人も居たであらうし、ロマの役人も居たであらう、而もかゝる世界的なる都がナザレを去る事數哩の所にあつたといふ事は、木匠イエスの人生經驗に重大なる影響を齎らさなければならぬ。故に我等はこの都について、稍詳細なる智識を有たなくてはならぬのである」と詳しく書いてあるんです。

イエスは大工でしょう、材料を買いに行ったり製品を売りに行ったり、1時間ですよ、歩いて。しょっちゅうイエスは行っていたのではないか。ナザレは村でしょう。セフォリスは都会です。ガリラヤは辺境だと言われています。エルサレムから見たら確かにガリラヤは辺境です。花巻みたいなものです。宮澤賢治の。宮澤賢治はイエスにちょっと似ていますね。イエスはセフォリスによく行っていたのに、なぜセフォリスのセの字も出てこないのか。幼少時代が書かれていないことも大きいですが。ナザレは書いてある。ガリラヤも歩き廻っている。セフォリスに少年、青年時代に行っているはずなのに、その後なぜ行っていないのですか。書かれていない。こういうことを調べるのが聖書学者ですよ。

橋本　エッセネについても書いてない。

笠原　それと一緒です。隠している。なぜセフォリスを隠さないといけな

いのですか。

橋本　エッセネは後になって遺物が出てきました。20世紀になって。そこでキリスト教とのつながり、洗礼者ヨハネとのつながりとか、考古学的研究も含めて大いに論じられています。ヨハネはクムラン宗団の中で訓練を受けて独立して自分のグループを作ったであろうと。遺物が出てきたから言えるわけです。セフォリスについては福音書とつながる現物が出てこない。

笠原　町は今もあるのでしょう？

橋本　考古学的に発掘はされていますね。そこに大きな宮殿とかヘレニズム的な劇場があったとか発掘されていますね。

笠原　それなら面白いじゃないの。イエスはナザレの田舎者ですけれど、セフォリスへはよく行っていたでしょう。イエスはギリシャ語を読めたという説がある。セフォリスはヘレニズム的な都市です。ガリラヤは国際的な地方です。辺境というが、エルサレム中心主義の政治的な面からは辺境です。聖書の歴史はアナール学派の唱えた社会史をもっとやらないといけない。教会史でも牧師の思想、説教、神学は大事です。同時に礼拝にくる女性の髪の形はどうなのか。日露戦争のあとなら「二百三高地」なのか。バザーで売られていた初期のカレーライス、サンドイッチ、その値段はいくらだったかということを考える必要がある。カール・マルクスの『資本論』と『窓際のトットちゃん』を同列に並べて考えないといけないのと同じように、牧師の神学と同列にバザーで売られているカレーライスの値段、女性の髪形を考えないといけないというのがさっきの説なんです。セフォリスはそういう場所であるとすれば、面白い。これを研究して下さいよ。

橋本　なぜ出てこないか、ですが。

笠原　わかる？

橋本　おそらく初期のキリスト教徒が伝道していてうまくいかなかった。そのため、キリスト教側の視野に入らなかった。伝承の中に反映してこなかった。マタイ11章でいくつかの町の名前が出てきます。それは「コラジンよ、ベトサイダよ、お前たちはソドムよりもひどい罰を受けるだろう」とあります。これは伝道しに行って失敗してやられて帰ってきたつらみが

ある。それがイエスの言葉として伝承に残る。

笠原　それは面白い。

橋本　初期の伝道のイエスの視野の中にセフォリスが入っていなかった。

笠原　おかしいな。

橋本　セフォリスはイエスが生きていた頃、政治の中心でもあるし、同時にローマの権力の支配でもあるし。

笠原　ギリシャの文化もある。

橋本　イエスの言葉の中で「1マイル行くことを強いられれば2マイル行け」とかは、ローマ人に抑圧されて徴用されるわけですね、人足として。そういうこともあるでしょう。セフォリスの町はローマ式の町ですね。ヘレニズムの町です。イエスが死んでから30年ほど後にユダヤ戦争がありますね。その時に、この町はローマ側につく。

笠原　ああそうか。なるほどね。

橋本　抵抗せずに、さっさと町を明け渡して。

笠原　賢明ですね。

橋本　初期の人たちにとっては伝道の視野に入っていなかった。

笠原　それはイエスじゃなくて教会の問題ですね。教団の問題ですね。富森先生の本を読んで、セフォリスが気になった。宮殿という言葉は出てくる。柔らかき着物を着飾って宮殿にいると。セフォリスのセも出てこないが、宮殿は出てくる。

橋本　しかし権力者のいるところはエルサレムだけではない。ヘロデ一家がね。神殿とは別にね。

笠原　宮殿はどちらか。セフォリスである可能性もある。イエスが行ったとすれば。

橋本　一度現場に行ってみたいですね。

笠原　現場といえばナザレの山の上から見たら地中海が見えると聞いて、アッと思ったね。

橋本　ナザレからは見えないでしょう？

笠原　山の上から見えるという。滝沢武人氏が10日間ナザレにいて、山の

上に登ったら、遙か西に青い地中海が一線に見えた。イエスもたまに山の上に登っただろうと思います。

橋本　私もナザレに行きましたが、気がつかなかった。

笠原　それですばらしいと思ったのは、イエスの思想にはガリラヤやユダヤといったローカルでもなければナショナルでもない、ユニバーサルな、コスモポリタンなものがあるのは水平線を見たからかもしれない。しかも西でしょう。陽が沈む。当時はローマ帝国は勃興期です。やがては沈むであろう。アウグスチヌスが後に『神の国』を書いたのは、ずっと後ですよ。その頃にローマが滅亡すると言うのはやさしい。イエスはもっと早く想像したかもしれない。

橋本　そういう国際的な感覚は、あのあたりでは当然出てくる。エルサレムの中に住んでいるのでない限り、ディアスポラのユダヤ人はしょっちゅう来るわけです。山の上に登ってなくても外国はどうかということはあるでしょう。

笠原　インターネットがなくても、国際的な感覚は持てるんです。インターネットよりイマジネーションのほうが大事です。

それと福音書には女性と子供の問題はあるが、老人問題がない。ルカ福音書の２章にアンナという老人が出てくるだけです。イエスが早く死んだからかな。

橋本　当時の平均寿命は短い。老人になる前に死んでしまう。

イエスにおける独身性

笠原　今、老人問題が盛んですが、キリスト教は困っているのではないか。イエスは何も言っていないから。独身者性は面白い。人間は独身者性を持ってないとだめですよ。

橋本　彼が言ったことは独身だから言えることは大分ありますね。

笠原　思想としての独身者性です。妻帯者であろうと子どもが何人いようと、独身者性はある。イエスの魅力はそれなんです。イエスの独身者性は魅力ですと現代の女性は言っている。

橋本　家から出ていく姿勢を一生持っていたし。日々十字架を負うて私についてきなさいというような言葉は、家族のある人間にはとても言えませんね。

笠原　イエスは「危険な人」ですよ。今では家族が大事だとみんな言う。イエスを見なさい、そんなことは言っていない。「善悪の彼岸」ですよ、ニーチェ風に言えば。公文書を書き換えてもいいから友だちを作れとか。よい者の上にも悪い者の上にも神は雨を降らせるとか。イエスは道徳家ではないんですよ、それが真の宗教性というものです。

橋本　お供えものを持って神殿に行って、友だちと仲違いしているなら、宗教儀式を後回しにして、まず人間関係を回復せよとも言ってますね。

受難物語の歴史性

笠原　イエスの最後の言葉とされているあたりをやりましょう。

橋本　裁判の場面から始まって死ぬ場面まで、史実がどの程度まであるかとなると、疑わしい。

笠原　受難物語ですね。

橋本　受難物語がキリスト教を成り立たせている。イエスの死の意義、贖罪ですが、歴史的には疑わしいものがある。裁判で誰が現場にいたか。アリマタヤのヨセフという議員がいて、後でクリスチャンになって情報提供をしたということがあり得ますが、いささか疑わしい。

笠原　イエスは最後に神に捨てられたと思ったり、血の汗を流して祈ったりしている。それでも願いは聞かれない。最後は甘受している。覚悟している。神に捨てられたと思った。それを神に捨てられたと思って死んでもいいという、逆説としての大肯定として、受けとりたい。

橋本　なぜ大肯定になるのか。大否定でもいいわけでしょう？

笠原　大肯定は肯定、否定を超えているわけですから、大否定と言うより大肯定と言う方がわかりやすいでしょう。

橋本　大否定でもいい。

笠原　それじゃ『イエス　逆説の生涯』の改定版では大否定とするかな。

橋本　百卒長の言葉はフィクションだと思いますね。それはね、その瞬間に神

殿の幕が裂けたとか、この人は神の子であったとか、マルコ福音書全体の叙述の枠組みの中では最初にイエスが洗礼を受けた時に、天が裂けて神の子だと天からの声があったとあります。それとこれが対応している位置づけです。

笠原　マタイ福音書が百卒長の言葉を地震や復活がおこったのを見たからとしているのはひどい。それでは逆説ではない。

橋本　もう一つは、神の子だったと告白するのは異邦人だったというのが、マルコのこれからの伝道の戦略的な意味があるだろうと思いますね。これからユダヤ人に伝道してもだめだと。異邦人だと。クリスチャンのモデルがここにいるというようになっていると思います。

百卒長の言葉は、マルコが執筆以前に構想を練って、最初の1章の洗礼の場面で天が裂けて神の子だという宣言があり、最後のところで、神殿の幕が裂けて神の子だという宣言が出てくる。始めと終わりの対応を考えて書いている。こういう技法で、こちらは天からの声、こちらは異邦人の声というスキームがあって。

笠原　小説の書き方としてはよろしい。

橋本　歴史性はあまり考えられないのではないかと思うんですね。

笠原　なぜ歴史学者は歴史にこだわって想像を拒絶するんですか。書いた本人が想像的なのに、それ以上想像しないといかんでしょう。

橋本　それは、そういうふうに文章ができていると発見して、それを証拠にして考えを提出するのであって。

笠原　その考えがあまり提出されていない。

橋本　もう一つこだわるのは、あれを疑問文として考えたら面白い。ギリシャ語はもともと疑問文の文体があるわけではない。文章にもクエスチョンマークはない。「この人がほんとに神の子だったのか」という疑問を投げかけたとしたらマルコ全体の思想から離れてしまいますけれども。ルカのところで最後の晩餐の場面で「剣を用意しなさい」「二組あります」「それでよかろう」と言います。疑問文にしたら「それでいいのか、もっとたくさん用意しておかないと間に合わないではないか」となってしまう。テキストは固定的に考えず、平叙文か疑問文か解釈しながらやらないといけない。

笠原　文学としては疑問文ですね。

橋本　そうですね。我々は平叙文で読んで、マルコ福音書の最初と対応させた構造になっていると考えて。イエス自身がエルサレムに行く時、自分が死ぬという覚悟をどれだけしていたか。

笠原　その点については勇み足があるんですが、佐藤研さんが『春秋』の1999年11月号に、私の本の書評を書かれて、「もう一点不都合を感じるのは、著者(笠原)の原始キリスト教会観にある。著者はこの点、ニーチェ等にも似て、総じてアプリオリ的に否定的であり、一種の先行判断を感じざるを得ない。そのために、イエスが殺された直後に直弟子たちに何が起こったか、その彼らの魂の悲劇的ドラマがほとんど真面目に考慮されなくなる。イエスを捨てて逃げたガリラヤの漁民たちの絶望と自己呪詛の中に、一体どのような『権力意識』を想定できるというのであろうか。しかしながら人間とは、絶望の果ての自己壊滅の中でこそ、何か異次元の真実を悟ることがある。その『悟り』を彼らは『イエスは起こされた』(いわゆる『復活』させられたの意)と表現した。その表現法の、とりわけ現代における是非はなお議論の対象になろう。また、そこからやがて発展・導出される教会体制ないし教義は、問題なしとしないであろう。しかしこの、絶後に蘇った弟子たちの体験の構造とそのエネルギーには、依然として目を見張らすものがあると私には思える。それこそ、彼らが彼らなりに、『救済のないところに、「それでよい」という声なき声の「大肯定」を聴』いた瞬間だったと思われるからである。私は、原始キリスト教全般の傾向についての著者の鋭い批判には多くの賛意を覚えつつも、今述べたこの点の掘り下げのないことを、どこか残念に感ずるものである」という批判をいただきましたが、これには賛成できない。直弟子と言われている者は生前、イエスに従って一緒にやっていながら何もわかっていない。イエスの真意が。

橋本　わかっていないかどうかはともかく、イエスが殺された。

笠原　わかってなかった。ペトロはしょっちゅうイエスに叱られている。イエスの真意がわかってなかった。ところが今度、イエスが死んだ後で、復活したと信じて、イエスをキリストにまつり上げて、またもやイエスを誤解した。この責任は重大ですよ。ペトロを弟子にしたイエスは人を見る目がない。

復活ということ

橋本　復活という体験がどういうものであったかはさておきまして、イエスの死、復活を見ることによって人生についてのアナキズムのような、イエスの考えたものに多少接近することができたんではないでしょうか。

笠原　復活によって、イエスを肯定するという意味ですか。

橋本　イエスの生き方が少しはわかりかけた。

笠原　イエスは死ぬまで生きたのです。それを復活という意味で言うならわかりますよ。

橋本　イエスの生き方に対して、なぜこういう結果が出てくるのか。権力構造との経緯やユダヤ教との宗教的な対立と政治的な世俗的なからみがありますが、イエスが人の命が大事だといいながら最後は自分の命が奪われるというパラドックスがあるという、ばかばかしい結果になることに対して、彼らは深い絶望感に陥る。その絶望の中から何かがわかったのだが、それはなぜか。イエスが死んでから数日後、ある特定の人ではなく、かなり広い人たちに共有できた。それを彼らは復活だと表したのでしょう。

笠原　復活ということを「瞬間の了解」というのであればいいですよ。瞬間の了解を復活という事実として理論としてドグマとした。それも弟子たちじゃないの？

橋本　それは世界観の構造と関係があると思う。「死んで陰府に下り、天に上りて」という図式の中でしか彼らは捉えることができなかった。

笠原　周縁の方が中心より大事だと思っていますが、周縁にいた人たちは、イエスをキリストとせずに自由な教師として見た人がかなりいた。復活を瞬間的な了解と思った人も。イエスをキリストにまつり上げる人ばかりではなかった。そっちの方が本物じゃないですか。直弟子ではない方がイエスに近いという意味です。

橋本　Qのグループのことですが、そういうグループがグループとして存続しなかった。受け入れ、保存できたのはキリスト教の方だった。

笠原　Qはどういうふうに使われたか。マタイやルカの中で使っているん

だけれど、大枠から言うとイエスをキリストの中に入れている。だから聖書にはプラスもあればマイナスもある。

橋本　その大枠の中にはマルコも同じようなものです。

笠原　イエスの弟子たちは生前イエスを理解しなかった。誤った。死後も「瞬間の了解」はあったかもしれないけれど、それ以後またもやイエスをキリストにして誤解した。だから私は弟子の理解ではなく、イエス本人、そしてイエスに近い、弟子にならなかった周縁の女たちや無名の人たち、そういう人たちこそ、イエスの思想、イエスの真意を理解したと思っている。イエスは今に至るまで知られざる人ですよ。キリストにされたため世界で最も有名な人になったが、実は無名の人です。だから、無名の人々、キリスト者でない人の方がよく理解できるのです。

今度、佐藤研と私が編集して、荒井献と吉本隆明と、音楽の礒山雅と美術の木下長宏といった人たちとした鼎談をまとめて春秋社から出すのです。仮題ですが、『イエスとはなにか』というのです。

橋本さんのご指摘を伺って感じるのは、橋本さんは樹を見て森を見ず、私は森を見て樹を見ずですね。そういう感じがするでしょう。

橋本　私はマルコ福音書には作為があると思います。

笠原　すべての文書には作為がある。マルコはかなり歴史的だと言われているけれど、そうではない。

橋本　イエスがどれくらい自分の死について意味をこめたか。福音書からはわからないですよ。

笠原　最後に一声高く叫んだのは事実だろうということは荒井献さんも言っていた。それが面白いんですよ。

橋本　受難物語にはいくつのかタイプがあって、共観福音書の中でも、マルコの中だけでも、いくつかの伝承がダブっているところがある。ゲッセマネでイエスが祈るために行ったり来たりする。どうも二つの伝承があって、ダブらせた結果、イエスが行ったり来たりする結果になったという分析が可能なんです。随分前にドイツで検証されています。イエスが死ぬ時も、一声大声を叫んで死んだ。これも二つ伝承がダブっている。イエス自

身が自分の死をどの程度予想していたか、自分の死の必然性を計算間違いしたこともあるのではなかったか。

笠原　計算の人ではないですよ。

橋本　なんでああいう結果になるのか。絶望の中でイエスの生き方ではだめだと。

笠原　根本的にはイエスは死を甘受しているのです。

橋本　イエスのような思想や生き方では人間は生きられない。あれは人を生かす思想なのかと弟子たちが考えたでしょう。

笠原　弟子たちのは絶対者を欲する思想です。イエスはいわゆる絶対者ではない。イエスにとって神は絶対者ではなく、人間の究極的な問題性です。

橋本　死んで復活することによって初めて思想になる。

笠原　それに賛成する人はそれでやってくれと言いたい。キリスト教はキリスト教でやってくれ。しかし僕はキリスト教はイエスとは違うと言いたい。それは事実でしょう。

橋本　私はね、なぜキリスト教が成立したかということを見ているわけで。

笠原　キリスト教が成立したのはそういうことを欲する人が多いからです。つくられた思想ですよ。ところがイエスは違う。僕はイエスの方がすばらしいと思う。そういうキリスト教の救いは求めてない。かつて求めたこともあったが、イエスのことがわかってきてから、考え方が変わったのです。

橋本　第二の悔い改めのような？

笠原　回心？　逆回心か。救いなどというものはないということがわかったのが私の救いです。ともかくイエスのように「死ぬまで生きる」と言いたい。

橋本　そこまでイエスにこだわるのは何なのかなと思います。

笠原　惚れた人のことを説明するのは言葉では言えないでしょう。禅宗では無がリアリティとしてある。エックハルトの影響を受けたシレジウスが「なぜという理由なしに」という詩を書いている。「薔薇にはなぜという理由がない。薔薇は花ひらくゆえに、花ひらく」と。

橋本　イエスが生身の人間として動いたというところに鍵があって、それ

は我々、物語化しやすい。

笠原　宗教哲学は理論的には面白いとしても、リアリティがない。なにもイエスだけがリアリティではない。仏陀であろうとマルクスであろうと隣のおばさんであろうと、人間にはリアリティがある。そういう意味でイエスを言うので、宗教哲学ではない。まして神学ではない。

橋本　イエスは物語として提供されているところがミソでしょうね。加工する余裕があるというか。話にコミットできます。

笠原　そうです。弟子たちは正しい解釈はこうだと教えてほしかった。だがイエスは正しい解釈を教えていないんです。ああいう教師はすばらしいですよ。ヒントを与えたのです。自分で考えろ。正解はないんだと。

橋本　それでは、このあたりで。どうもありがとうございました。

（2000年5月18日、同志社大学神学館にて）